

桜の花と日本人の心

今年は桜の開花が例年より早く3月後半には東京の桜も一気に満開となりました。花の色は移りにけりないたずらに我が身世にふるながめせしまに（小野小町）世の中にたえて桜のなかりせば春のころはのどけからまし（在原業平）ねがわくば花のもとにて春死なむそのきさらぎの望月の頃（西行）

どれも高校時代の国語の教科書に出ていて、掛け詞とか作詞者の本心がどこにあるのか、等について担任から解説を聞き学んだ短歌です。

さまざまの事思ひ出す桜かな——俳聖・芭蕉



桜を詠んだ俳句も数知れません。それほどに、桜は日本人にとって大事な花であり生命を揺さぶってくる何かがあるのでしょう。

私も現役時代、聖教新聞の特派員としてパナマに駐在中、遠くに桜に似た花を見て“胸キュン”となった経験が何回もありました。2月から3月——亜熱帯にあるパナマは乾期の最後で雨は全く降りません。芝や草はすべて褐色に枯れ、雨の降るのを待ち焦がれている。そんなパナマ市内や地方の道路を運転していると、遠くに薄いピンク色の花を付けた木が目に入っていきます。その瞬間、なぜか胸がキュンと締まるというか、何かジーンと込み上げてくるものがあるのです。

近づいて見ると色はピンクで桜色なのですが、花自体は桜よりはるかに大きく、いわゆる「熱帯の花」といった感じです。それなのになぜ“胸キュン”となるのか——もうこれは、幼い頃から桜を見て育った日本人としての心の自然な発動という以外にない、と思うのです。それほどに桜の花は日本人の心の奥底深く刻み込まれているのでしょう。

桜は春を象徴する花として開花予報、開花速報がメディアを賑わすなど、話題・関心の対象としては他の植物を圧倒しています。入学式を演出する春の花であり、また電報などの文面では、「サクラサク」は合格を、「サクラチル」は不合格の意味に使われていました。秋のコスモスは桜に似た花の形から「秋桜」と書かれています。

こんな人々の心を動かすサクラの花も今は世界の各地で見られるようになってきました。アメリカの首都ワシントンのポトマック河畔の桜は日米友好の象徴として有名ですが、パナマ駐在中に一時帰国で日本に戻る途中の3月、その光景を眺めることができました。そのほかヨーロッパではロンドン、パリ、ベルリンなど、アジアでは中国や朝鮮半島にもかなりの種類があるようです。南半球のニュージーランドからもサクラの便りを聞くようになりました。



今日、4月1日には昭島市陸上競技場を囲むように周辺に咲く桜の下を3周、ウォーキング大会に参加してきました。世界に広がった“平和と友好の大使”——誰からも愛される桜の花のように残りの人生も潔く生きていきたいと願っているところです。